

1 夏目漱石

回り道の果てに大成した大文豪

なつめそうせき



■夏目漱石とはどんな人か

小説家としての漱石のデビューは、決して早くない。もともと英文学者であつた漱石は、政府からイギリス留学をさせてもらうが、肝心の文学の勉強はちつともできず、結局行きづまつて帰国する。その後、東京大学の英文科の講師となつたが、前任者のラフカディオ・ハーンの人気が高かつたため、その後を継いだ漱

石は、必ずしもいい教師とは評価されなかつた。そんな回り道の果てに、三十八歳の時、^{*}高浜虚子の勧めで雑誌「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を発表し、好評を得る。そして作家としての名が高まるに、あつさり東京大学の職を捨て、小説家を本職としたが、これは当時世間を驚かせる転職であつた。デビューこそ遅かつたが、作家として立つたあとは、朝日新聞を舞台に次々と作品を発表し、

小説家の代名詞のような存在になつた。また、多くの弟子たちに慕われ、各界の俊英^{しゆえい}がその元から巣立つていつたが、家庭内では不和がたえなかつた。作家としての悩み、家庭人としての悩みに苦しみ続けた漱石は、神経症で胃を病み、それが原因で生涯を終えた。

(一八六七年、明治維新の年に江戸(現、東京都)で生まれる。一九一六年没、四十九歳)

*ラフカディオ・ハーン：元イギリス人で、

日本に帰化。東大退職後は松江に住み、小泉八雲の名で、多くの物語や隨筆を英文で発表した。「雪女」や「耳なし芳」を含む「怪談」で知られる。

吾輩は猫である▼猫が人間をバカにする？

デビュー作であると同時に漱石の代表作。人間たちの姿を、猫の目を通して、ユーモラスに、あるいは手厳しく描いている。漱石は猫好きで、この小説の猫のモデルも、飼っていた猫の一匹だった。「吾輩は猫である。名前はまだない。」という冒頭の部分はあまりに有名だが、その後に続く部分を読んで、この文豪特有のユーモア精神と、表現のおもしろさを味わってみよう。

坊っちゃん▼熱血先生、生徒・教師と大ゲンカ

「親ゆすりの無鉄砲で子供のときから揺ばかりしている。」という書き出しで始まる、痛快青春小説。赤シヤツやマドンナなどの登場人物にはいずれも強烈な個性があふれられている。ここでは「坊っちゃん」の少年時代を訪ねて、その人物像をさぐろう。



三四郎▼地方出身の三四郎が見た東京は？

「田舎の高等学校を卒業して東京の大学へ入った三四郎が新しい空気に触れる……」。作者によるこの予告が、作品の主題をあますところなく伝えている。三四郎が東京で経験する「新しい空気」は、今でも地方から上京する青年の多くが実感するところだろう。それに加えて、明治時代後期における日本の風俗や、世の中の動きが読み取れて、非常に興味深い作品である。

1 吾輩は猫である

◆次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

吾輩は猫である。名前はまだない。

どこで生まれたか、とんと見当がつかぬ。なんでも薄暗いじめじめしたところでニヤーニヤー泣いていたことだけは記憶している。吾輩はここで初めて人間というものを見た。しかも、あとで聞くと、それは書生という、人間中でいちばん獰惡な種族であったそうだ。この書生といふのは、時々われわれを捕まえて煮て食うという話である。しかし、その当時はなんという考えもなかつたから、べつだん恐ろしいとも思わなかつた。ただ彼のひらに載せられてすうと持ち上げられたとき、なんだかふわふわた感じがあつたばかりである。てのひらの上で少し落ち着いて書生の顔を見たのが、いわゆる人間というものの見始めである。このとき、妙なものだと思った感じが今でも残つている。だいいち、毛をもつて装飾されべきはずの顔が、つるつるしてまるでやかんだ。のみならず、顔の真ん中があまりに突起している。そうして、その穴の中から時々ふうふうと煙を吹く。どうもむせつぼくて実に弱つた。これが人間のむたばこというものであることは、ようやくこのごろ知つた。

この書生のひらのうちでしばらくはよい心持ちに座つておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのかわからないが、むやみに目が回る。胸が悪くなる。とうてい助からないと思つてみると、ドサリと音がして、目から火が出た。それまでは記憶しているが、あとはなんのことやらいくら考え出そうとしてもわからない。

ふと気がついてみると、書生はない。たくさんおつた兄弟が一匹も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。そのうえ、今までの所とは違つてむやみに明るい。目を開いていたらぬくらいだ。はてな、なんでも様子がおかしいと、のそのそい出してみると、非常に痛い。吾輩はわらの上から急に笹原の中へ捨てられたのである。

注 *書生 = 他人の家に世話をうけ、家事を手伝いながら勉強する青年のこと。

*獰惡 = 亂暴で非常に悪いこと。

*裝飾されべき = 「裝飾されるべき」のなまり。

ポイント 猫の目に映る人間の姿をどうえよう

(1) — 線①「非常な速力で運転し始めた」とあるが、どんな乗り物を運転し始めたのだと考えられるか。時代背景も考えて、漢字三字で書きなさい。

(2) — 線②「ドサリと音がして、目から火が出た」とあるが、猫は人間にどうされたのか。簡潔に述べている言葉を、文章中から五字で抜き出しなさい。

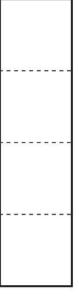
(3) 主人公の猫の目に映った人間の具体的な姿や行動について、次の□にあてはまる言葉を文章中から抜き出しなさい。

・顔には□がなく、□をしていて、その穴から



の煙をふうふうと吹く。

(4) 猫の目に映った人間の第一印象をまとめて表した言葉を、文章中から四字で抜き出しなさい。



していている。

(5) この文章の特徴として最も適切なものを次の□から選びなさい。



- ア 猫の置かれた状況を深刻に描いている。
イ 比喻や誇張などを用いて、ユーモラスに描いている。
ウ 人間と比べて猫が優れている点を客観的に描いている。
エ 猫と人間の心温まる交流を、簡潔な文体で描いている。

2 坊っちゃん

◆次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

おやじは、ちつともおれをかあいがつてくれなかつた。母は、兄ばかりひいきにしていた。この兄は、やに色が白くつて、芝居のまねをして女形になるのが好きだつた。おれを見る度に、こいつはどうせろくな者にはならない、とおやじが言つた。乱暴で乱暴で行く先が案じられる、と母が言つた。なるほどろくな者にはならない。ごらんのとおりのしまつである。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである。

【母が病氣で死ぬ】二、三日前、台所で宙返りをして、へつついの角であばら骨を打つて大いに痛かつた。母がたいそう怒つて、おまえのようなものの顔は見たくないと言うから、親類へとまことに行つていた。すると、とうとう死んだという知らせがきた。そう早く死ぬとは思わなかつた。そんな大病なら、もう少しおとなしくすればよかつたと思つて帰つてきた。そうしたら例の兄が、おれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと言つた。くやしかつたから、兄の横つつらを張つて、たいへんしかられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮らしていた。おやじはなんにもせぬ男で、ひとの顔さえ見れば、きさまはだめだ、だめだと、口ぐせのように言つて、しきりに英語を勉強していた。元来ずるいから、仲が良くなかった。十日に一ぺんぐらいの割でけんかをしていた。あるとき将棋をさしたら、ひきょうな待ちごまをして、ひとが困ると、うれしそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手にあつた飛車をみけんへたたきつけてやつた。みけんが割れて少々血が出た。兄がおやじに言つけた。おやじがおれを勘当すると言い出した。】

今に分からぬ。妙なおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか言つて、しきりに英語を勉強していた。元来ずるいから、仲が良くなかった。十日に一ぺんぐらいの割でけんかをしていた。あるとき将棋をさしたら、ひきょうな待ちごまをして、ひとが困ると、うれしそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手にあつた飛車をみけんへたたきつけてやつた。みけんが割れて少々血が出た。兄がおやじに言つけた。おやじがおれを勘当すると言い出した。】

そのときはもうしかたがないと観念して、先方の言うとおり勘當されるつもりでいたら、十年來召し使つている清といふお手伝いが、泣きながらおやじに謝つて、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらず、あまりおやじを怖いとは思わなかつた。かえつて、この清といふお手伝いに氣の毒であつた。このお手伝いは、もと由緒のある者だつたそつだが、瓦解のときに零落して、つい、奉公までするようになつたのだと聞いている。だから、ばあさんである。このばあさんが、どういう因縁か、おれを非常にかあいがつてくれた。不思議なものである。

ポイント

描かれている人物の姿をつかもう

(1) 次の人々は、「おれ(坊っちゃん)」のことをどのように少年と見ていくか。最も適切なものをあとから選びなさい。

① 父と母

② 兄

③ 「おれ」自身

④ 清

ア 正直でいい性格をした少年。

イ あつかいに困るだめな少年。

ウ 親不孝で母親を早死にさせるような少年。

エ うそつきでひきょうなところのある少年。

オ 人に好かれることのない少年。

(2) 「おれ」は、次の人々をどう見ているか。最も適切なものをあとから選びなさい。

① 父

② 兄

③ 清

ア 優しくて全面的に信頼のおける人間。

イ 勉強家でまじめな反面、ずるいところもある人間。

ウ なんにもせず、理屈に合わない小言を言う妙な人間。

エ 冷静で客観的に事の善し悪しを決める人間。

オ 「おれ」をちやほやすするが、その理由が分からず、少々不気味に感じられる人間。

(3) A・Bにあてはまる言葉として最も適切なものを次

A

B

る。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年じゅう持て余している——町内では乱暴

の中から選びなさい。

A []] B []]

ア 自分でもそう思っているんだ

イ オレはおせじはきらいだ

ウ そう言つてくれるのは清だけだ

エ それだからいいご気性です

オ 清はかなしゅうございます

カ そんなことをおっしゃってはいけません

者[の悪太郎](#)とつまはじきをする——このおれをむやみに珍重してくれた。おれは、とうてい人
に好かれるたちでない、とあきらめていたから、他人から木の端のように取り扱われるのは、
なんとも思わない、かえって、この清のようちやほやしてくれるのを不審に考えた。清はと
きどき台所で人のいないときに、「あなたはまつすぐでよいご気性だ。」とほめることがときど
きあった。しかし、おれには清の言う意味が分からなかつた。いい気性なら清以外の者も、も
う少しよくしてくれた。すると、ばあさんは、[] B [] と言つては、うれしそうにおれの顔を
ながめている。自分の力でおれを製造してほこてるよう見える。少々気味が悪かつた。

[注] * やに 「いやに」のなり。

* 女形 [歌舞伎](#)で、女の役をする男の役者。

* 犯役 [罪](#)を犯して刑務所に入ること。

* へつつい [煮](#) [炊](#)きする設備。 かまと。

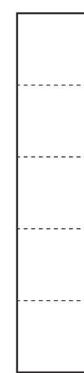
* 待ちごま [将棋](#)で、相手の王の逃げ道がなくなるようにこまを置く指し手。

* 言つけた 「言いつけた」のなり。

* 瓦解 [物事](#)がいつぺんに崩れること。ここでは、江戸幕府が倒されたことをいう。

(4) 一内(6~18行目)には、一か所だけ「おれ」の後悔や

反省の気持ちがうかがわれるところがある。その気持ちが最もはつきり表されている一文の、初めの五字を文章中から抜き出しなさい。



(5) 「おれ」が自分自身のことをたとえている三字の言葉を、文

章中から抜き出しなさい。



(6) この文章には、「おれ」のどのような性格が描かれているか。
適切なものを次の中から五つ選びなさい。

[] []

ア 無鉄砲 (向こう見ず)

イ さっぱりしている

ウ 泣き虫

エ 執念深い

オ 亂暴者

カ 人の目を気にする

キ 短気

ク 細やかな神経の持ち主

オ 真つ正直

コ 考え深く慎重

サ ひねくれ者